

6シーズンぶりの優勝

六大学野球観戦同好会

画像観戦 5.21 は神宮球場

今季リーグ戦は、2019年以来の2戦先勝の勝ち点制の復活となり、また、延長戦は、1試合開催日は15回、2試合開催日は12回まで、プロ併用日の2試合開催日は9回打ち切りとなる。観客は、外野席は開放せず、内野席のみで上限は1万5000人。応援団は、感染防止の観点から内野席での使用は不可で昨年同様一般席開放なしの外野席での応援となる。



その後、第7週:5月21日(土)対立教1回戦より漸く応援団(部)の応援エリアを内野席に変更し、外野席の一般販売を行い、観客数は上限26,000人となった。

しかし、観客は応援団の活動エリアには立ち入れず、大声を出しての声援、校歌や応援歌を歌うこと、肩を組んでの応援なども引き続き禁止となる。

2022 SLOGAN

昨年度は春秋共に3位と優勝を逃してきた。今年度のチームには敗北の悔しさを感じた選手が多く残っており、さらに、4年生は“頂”を経験した最後の世代だ。

村松 開人(静岡)主将は、「新チーム始動にあたり、“**頂 戦**”というスローガンのもと、リーグ戦優勝・日本一という“頂”を掴むために、挑戦者としてのハングリー精神を持って

日々練習に取り組み、勝てる組織そしてそれに相応しい人間力の形成に努めてきた」と説明し、リーグ戦開幕に際して意気込みを披露している。



5/21 対 立教戦 （神宮野球場観戦記）

第7週の立教戦は最終戦であり、勝ち点を取った方が優勝となる天王山で、



応援団が内野スタンドに戻ってきた。雨が降る中、内野席前方“定位置”で選手へ声援を送った。（中藤有里団長以下）

途中、雨が強くなり試合は一時中断となるも応援リーダー席だけは空けないで「俺が守り抜く」という意気込みを示していた。（写真）

試合は、明治エース蒔田（九州学院）と立教は荘司（新潟明訓・ドラフト注目投手）の投手戦で両校ともに7回まで無得点という緊迫感の中で進んできだ。しかし、8回にリリーフ高山が打たれ、立教に3点先行されると「ついにこれまでか・・・」と若干の諦めムードが漂う中、8回に長南の適時打で1点返し、9回には堀内、西山の適時打でついに同点に追いついた（気分は最高潮）。その後、延長12回に規定により引き分けとなった。結果的に、この引き分けに追いついたことが転機となり、以後の試合の流れを変え、第2・3試合を連勝し、6シーズンぶり41回目の優勝を決めた。

今季は主将の村松が2月に右膝を手術。エース候補の左腕・藤江も肘の不調でベンチ外と苦戦が予想された。しかし蒔田、村田の3年生右腕2人が試合ごとに成長し、村田が5勝、蒔田が4勝と“ダブルエース”となり、チームを支えた。打線も2年の宗山が常に4割以上をマーク。主砲・上田が15打点と主将の抜けた穴を埋めた。

これで優勝回数は、

1位 早稲田・法政 46、3位 明治 41、4位 慶応 39、5位 立教 13、6位 東大 0
個人タイトルでは宗山 塁 遊撃手（2年・広陵高校）が首位打者となり、ベスト9には次の5人が選出された。

投手 蒔田 稔（3年・九州学院）

捕手 蓑尾 海斗（4年・日南学園 2回目）

一塁 上田希由翔（3年・愛産大三河）

三塁 山田 陸人（4年・桐光学園 2回目）

遊撃 宗山 塁（2年・広陵高校 2回目）

※特に宗山選手は2シーズン連続の満票（13票）で未だ2年生。今後の活躍に期待大です。

勝敗表

	明	慶	立	法	早	東	試合	勝利	敗戦	引分	勝点	勝率
1 明大	---	●○○	△○○	●△○○	○●○	○○	15	10	3	2	5	.769
2 慶大	○●●	---	○△○	●○●	○○	○○	13	8	4	1	3	.667
3 立大	△●●	●△●	---	○○	○○	○○	12	6	4	2	3	.600
4 法大	○△●●	○●○	●●	---	○○	○○	13	7	5	1	3	.583
5 早大	●○●	●●	●●	●●	---	△△○○	13	3	8	2	1	.273
6 東大	●●	●●	●●	●●	△△●●	---	12	0	10	2	0	.000

2022.5.31

栗田 孝行